

れども字はなほもとのまゝに、攝津とか、れたる故に、後の人皆これをもとより國名と思ふめり、さて文には攝津と書ながら、職にて有しほども、口によぶ詞には、たゞ津のつかさとぞいひけむ、さらではよぶべきやうなし、國の列になりてはさらなり、然るを俗にセツつとしもよむはいふにたらぬひがことなり、今の世にも津の國といひ、攝津守なども、つのかみとよむぞ正しかりける、むかし女房の名にも攝津といひし有て、撰集などにも出たり、これもたゞ津とこそはよびつらめ、續世繼に、津のごとぞある、ごは伊勢のごなどいふごなり、

〔諸國名義考上〕攝津

和名抄に訓法なし、たゞ津とのみよむべきか、名義は即津なり、津は同抄に、四聲字苑云、津渡水處也、唐令云、諸渡關津及乘船筏、上下經津者、皆當有過所、和名とあり、然るを神武天皇御代に、奔潮太急にあひて、浪速國と云しを、後に訛て難波といへるよし、國史に見えたり、其後仁德天皇御代に、皇都となし給ひて、高津宮と號く、さて高津とは岸高ければにや、下河邊長流が續歌林良材集に、此國風土記を引て、天稚彦に屬て下れる神、天探女磐船に、乘て爰に泊る故に、高津と號くといへり、○下略

〔屠龍工隨筆〕みよし野とは、吉野山の峯をい、○中略浪花も、もとなみはやの國とい、ぬれば、同じ津の國とても江によりたる今の大坂のあたりを、ことさらにい、たるならん、

位置

〔地勢提要〕各國經緯度 附里程

攝津大坂、長堀留田屋町極高三十四度四十分、經度西一十五分、從東都東海道一百四十六里三十四町一十間、

攝津兵庫家、新在町極高三十四度四十分、經度西三十二分半、從東都東海道一百五十二里二十七町三十八間、